本丸通信

発行所
月日星
編集
セキレイ
@WagtailW
http://wagtail.chagasi.com/meho.html

語物宝名本日

故小松宮さま御至愛の北山王自刃の宝刀

六百年前の琉球を語る「千代金丸」奇を秘めて尚侯爵家の庫深く一上

日七月二

尚侯爵家に、五百年前から伝わる一振の銘刀、「千代金丸」、刀身二尺三寸六分、水もしたたる大乱れ――これが、明治四十二年の夏、手入れをした時「伝家の名宝たるのみならず、天下の至宝なり」と、当時鑑定の大家、今村長賀、關保之助に、こう折紙をつけられた。

――この名宝のものがたり。

○

文字通り、天下麻の如くに乱れ群雄、土地せまきまでに四方に割拠して虎視眈々、大は大に、小は小に、ひとしく一つの骰子（サイコロ）に、運命を賭けてころげ廻る戦国時代、博ち合う浪頭のみ、いたづらに汐の香にむせぶ琉球にも、同じ闘争に追わるる日が続いた。この島に割拠する三人の権力者、北山王、南山王、中山王の三人は、互いに三角形の頂点をもとめながら、争い闘うていた。

○

この島にも霖雨は続いた。かがりをたいてまどろむ兵卒の鎧糸や楯さえも、朽つるばかりに降りつづいた。やがて琉球の山河草木にも、目に浸みる緑色につづられたうるわしい夏姿を見た。――応永二十三年（1416）の夏五月、今の国頭郡を領していた北山王と、中頭郡に覇をとなえていた中山王とは、あらゆるものを力にかけて闘争を続けたが遂に、北山軍に呪われの日は来た。

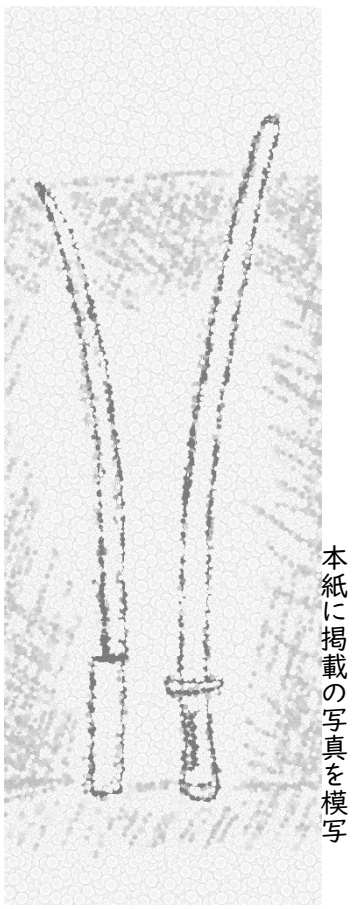
○

北山王の攀安知は、楔子（くさび）の如く食い入って来た敵の前に自刃をした。この北山王の自刃に用いた刀こそ「千代金丸」であった。爾来六百年、奇しき物語を秘めたまま宝剣は昏々眠りを続けている。尚家の祖先、尚圓王が、この刀を手に入れてから約五百年になる。

○

宝剣「千代金丸」が、王家に伝えられた事情は判明していない。が現在尚家にある由来書を見ると、こう記されている――。

北山王の宝刀＝（白鞘に納め替えられた刀身と最初のこしらえ）



本紙に掲載の写真を模写

北山王攀安知、千代金丸と名付けし累代相伝の宝刀あり、応永二十三年中山と戦い、終に敗北して城内二の丸に引揚げ、前代より城の守護神として尊崇する磐石の前に到り、予、今死を決す、汝、豈（あに）独り生まるやと云い、自ら腹を切り、其反す刀をもって磐石を十字に斬り、其刀を重間川に投じ而して亡ぶ、其後伊平屋島の人其刀を護る、其受剣石（磐石のこと）は北山城内に今尚存す。此宝刀は何王の時代王府に入るや記録明らかならず。

○

この「千代金丸」は、各所を転々したものとは思われぬ。尚王家初代目か二代目のころは、すでにこの刀は、尚王家の所有に属していたものであろう。――その推定が有力である、「千代金丸」は、いまでは尚家の護り刀とせられている。

○

明治二十三年、故小松宮殿下が琉球を巡視せられたことがあった。尚家へお立ち寄りの時、この名刀をご覧ぜられた。名剣にまつわる歴史と伝説、それを言上すると、殿下は「見事なる一振だ」と、刀を手にせられながら、六百年前の戦いの上に、はるかな想いを通わせられた。御帰還後も、刀剣の話が出るたび、「千代金丸」の話を遊ばすのを常とせられたという。

語物宝名本日

作は足利時代、騎兵刀――「類なき珍品」の折紙

島津勢の攻撃から逃れた唯一品

琉球王尚侯爵の至宝「千代金丸」ー下

日八月二

自分たちと関係ない戦争に追われて、久しい間、困窮と疲労に喘いできた琉球の民衆は、尚王家の手に、全島が支配されるようになってからは、初めて、安らかな夢を結ぶことが出来た。が、それも束の間で、慶長年間（1600前後）、島津家では、尚王家四代尚寧のころ、このなごやかな眠りを驚かせて、琉球討伐を企てた。琉球の軍兵は、この無遠慮な闌入（らんにゅう）者の前に、ひと溜まりもなくひれ伏して、尚寧王は、人質として薩摩へ囚われの身となったが、数年後、初めて帰島を許された。尚寧王は、王城には入らなかった。別にささやかな隠宅を設けて、怏々（おうおう＝不平不満）たる日を過ごした。総てを島津勢に奪われたうちに、宝剣「千代金丸」ばかり無事であったことは、今でも尚家に、奇蹟の一つとされている。徳川二代秀忠の時、日本に合併して、琉球王となった尚王家が、東京に居を構えてから、この「千代金丸」は、明治四十二年まで、一度も手をいれたことがなかった。

○

謎の宝刀、「千代金丸」に対し、麹町の今村長賀、小石川の關保之助――明治四十二年の当時、これ等名うての目利きが鑑定をした。折紙には、こう書かれてある。

千代金丸一口、作者不明、拵への年代足利時代に属す、大功羽二枚完備せるは、他に類なき珍品なり、柄は短くして騎兵刀の様式を具え、頭槌形に成り、能く握るに適す、柄糸の巻方古式にしてすこぶる珍重すべし、別に柄袋を調製して覆い置くべきは勿論、取扱すべて丁重にして、糸を損せざるよう心得肝要なり。

○

――頭菊紋の毛彫は、想うに琉球特有の作ならん、京都の作とは思われず、刻する所の大世の二字、尚泰久王世代所鋳大世通宝の銘文二と、字画すこぶる相似たり、けだし大世は、同王神號大世主にとるか、鐔猪の目の金の中覆輪最珍也、鞘の熨斗付金に、縫目あるは帯取の跡なり、刀身の地金細かにして、焼刃亦同断、嬰え、伝家の宝刀たるのみに非ず、以て天下の至宝とすべし。

○

刀身が二尺三寸六分、刃紋乱れ刃で、裏と表に、五本の腰樋がある。中心（なかご）が三寸六分七厘で重さが九十六匁、目貫は金唐花で、目釘まで金無垢である。柄頭は頭槌形で、菊紋毛彫、ここに折紙で不思議がられている、問題の「大世」、この二字が彫まれている。

○

刀剣の愛好者は、「千代金丸」の存在に、久しい間、あらゆる話題を提供し、最大級のほめ言葉を用いて、限りなき羨望をささげて来た。専門家は手をつくして、再三再四、辞を低くして尚家に乞うたが、「千代金丸」はただの一度、これ等の眼にふれようとはしなかった。こんどこれが、わが社の名宝展に出展され、この宝剣が、愛剣家の総てへ聲をかけようとしている。不思議の機会が開かれたものといってよい。

○

前後一度、その手入れの時、立ち会った人々は、先代の尚侯爵夫妻と、家令家職のもののほかは、前に書いた鑑定者二人、研師の井上行造、杉本次郎、鞘師小掘正治とその門人一名であった。

尚家は鎮西八郎為朝の裔と称され、代々琉球王たり、当主尚裕侯は、先代尚昌の長男、大正七年九月生れ、邸は麹町富士見に在ったが、震災後は渋谷西郷山に新築移転した。

千代金丸實刀　由来

山北王攀安知千代金丸ト名□累代相傳
ノ實刀□□應永二十三年中山ト戦　終ニ
敗北シテ二ノ丸ヘ引上ケ前代□城ノ守護神
トシテ尊崇スル髻石ノ前ニ至リ予今ニ死
決ス汝豈ニ獨リ生ルヤトニテ自ラ腹ヲ切リ其
ノ反ス刀ヲ以テ髻石ヲ十文字ニ切リ其ノ刀ヲ
重間河ニ投シ而シテモブ其後伊平屋嶋ノ
人其刀ヲ護ニ其受剣石ハ北山城跡ニ今
尚ホ存ス此ノ實刀ハ何ニ王ノ時代王府ニ
入ルヤ記録詳カラズ

本紙には"千代金丸由来記"の写真"が掲載。右はその内容の写し。送りカナは写真では不鮮明なところが多く判別しづらい（□表記）が内容は、（上）で説明されている通りである。

第一回日本名宝展覧会目録

△　会場　東京府美術館
△　会期　昭和四年三月十九日より四月十九日迄

刀劍

御物　鬼丸太刀	帝室
黄金造太刀	閑院宮家
名物三日月宗近	徳川家達公爵
真守太刀	松平頼壽伯爵
名物大倶利伽羅廣光刀	伊達興宗伯爵
名物太鼓鐘貞宗短刀	同
名物紅雪左文字	徳川頼貞侯
千代金丸	尚　裕　侯
名物稲葉郷	松平康春子爵
珥加里貞次大脇差（にっかり青江）	京極高修子爵
荒木又右衛門佩刀	池田仲博侯爵
行平太刀	中山輔親侯爵
友成糸巻太刀	佐竹義春侯爵
名物順慶左文字太刀	蜂須賀正韶侯爵
正恒太刀	小笠原長幹伯爵
名物不動行光短刀	同
雉子頭太刀	南部利淳伯爵
家盛大太刀	弥彦神社
面ノ薙刀	細川護立侯爵
鬼切丸（髭切　目録未掲載）	北野天満宮